

第三次世界大戦3

パールハーバー奇襲

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿
画
安
田
忠
幸

目次

プロローグ	11
第一章 パールハーバー	19
第二章 爆撃評価	41
第三章 リメンバー……	70
第四章 サザンクロス作戦	98
第五章 A-10 攻撃機	126
第六章 ゴー・フォー・ブローク！	154
第七章 チョーク・ポイント	181
第八章 アラ・ワイ運河の恋人	204
エピローグ	219

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

ど もんこうべい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。

〔原田小隊〕

はら たたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずの ともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐしん た
田口苾太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ が ひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしげら たけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにし まきふみ

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

お だ ぎりしやう

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら

阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたく ま

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あま り ひろし

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の前田拓海一尉の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAIr)〉

し ば ひかる

司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〈第一ヘリコプター団〉

きたぎとみのる

北郷稔 陸将補。

かどくらしげのぶ

角倉重信 一佐。高級幕僚。

いそがいたく や

磯貝拓也 一佐。副団長。

むら た もり と

村田護人 三佐。村田家次男。

むら た りん こ

村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

《海上自衛隊》

〔海上幕僚監部〕

うえすぎしん ご

上杉慎吾 海将。海上幕僚長。

〔航空集団〕

ね ぎ まきはる

根本雅晴 海将。航空集団司令官。

おか だ やすし

岡田靖 海将補。航空集団幕僚長。

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさ や

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめ や とし お

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかね と

板東兼人 一佐。“かか”艦長。

かねさか

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら みさ
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36 Aのライセンスももつ。

ま じまけい こ
真島恵子 二佐。整備中隊を率いる。

くまかわたかし
隈川隆 三佐。第七飛行隊副司令。

〔インド洋派遣艦隊〕

え がわとし き
江川俊樹 海将補。

たけうちこうすけ
竹内幸輔 二佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦“ほうしょう”〕

いずみ だ せんえい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐちはじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あす か
宮城明日香 一尉。気象班長。

〔第一潜水隊群第三潜水隊〕

み くりやみね お
御厨峰男 一佐。

なかがわたいぞう
中川太蔵 二佐。そうりゅう型潜水艦“けんりゅう”（四二〇〇トン）艦長。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートの上司。

アマンダ・マクノート 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〈空軍〉

イーサン・ローマ 大將。空軍参謀次長。

〔第一三爆撃飛行隊〕

ケンドル・マコーミック 空軍中佐。第一三爆撃飛行隊を率いる。JFK空港で事故を引き起こしたB A機には、妻と、娘二人が乗

っていた。

マシュー・クック 少佐。副隊長。

アンディ・マルチネス 大尉。副隊長機の副操縦士。

シンディ・ガリクソン 大尉。部隊で一番若い。“スピリッツ・オブ・キティーホーク”号副操縦士。

〔第九四戦闘飛行隊〕

マット・シンクレア 中佐。第九四戦闘飛行隊隊長。F-22A部隊を率いる。

チャック・クルーガー 大尉。

〔第五一戦闘航空団・第二五戦闘飛行隊〕

エドモンド・クック 中佐。飛行隊長。

マリコ・キャサリン・バク 大尉。オアフ島で生まれ育つ。

〈海軍〉

〔南シナ海派遣部隊〕

マイケル・ゴトー 中佐。南シナ海派遣部隊参謀。三代続く日系人。

〈陸軍〉

〔第25歩兵師団隷下 第4空挺旅団 “スパルタン”〕

クラーク・マッケンジー 中佐。大隊長。

カイル・バタスキー 中尉。第501落下傘歩兵大隊 “ジェロニモ”本部管理中隊付き偵察小隊を率いる。

トーマス・ワン 曹長。小隊を纏める補佐役。

マサミチ・ドウモト 伍長。

マック・キム 一等兵。韓国系。

ケイコ・ノックス 一等兵。

〔第7エンジニア・ダイブ分遣隊〕

ブルース・イノウエ 大尉。

ジミー・ボラード 伍長。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵師団第三海兵連隊〕

リーバイ・キックス 少佐。陸戦の指揮をとる若き指揮官。

イエーツ・マコノヒー 大尉。参謀役。

トム・ハワード IT長者。大統領の西海岸での最大の支援者。“ドラゴン・スカル”の湯国^{タンクワオチン}慶襲撃に巻き込まれ、娘が即死、妻は脊髄を損傷し半身不随となった。

中国

《中央弁公庁》

ファンシュエマオ

範学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

〈陸軍〉

ウェイリシイン

韋立新 少将。

ロンブワンフェイ

龍鵬飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

〔第一〇八特別監察旅団〕

ウビン リンカン

武彬 林剛の元上官。彼をスカウトした。

リンカン

林剛 中佐。

タオ ツモ

陶子黙 一級軍士長。

〔第一〇一待機旅団〕

イエシユイトン

葉旭東 少将。

トゥ ツ チエン

杜子健 大佐。参謀長。

チワンチュウファン

程卓凡 大佐。政治将校。

リュイチチチアン

呂志強 海軍予備役大佐。“シー・オブ・カシオペア”（一二五〇〇〇トン）船長。

スットン

蘇桐 中佐。情報参謀。

ツァイムウチン

蔡慕青 中佐。女性部隊を纏める。

〈空軍〉

ファンシン

方星 中佐。優秀な戦闘機パイロットだったが、数年前結核に罹り、それを機会にコクピットを降りていた。

ハオス

郝思 中佐。護衛の戦闘機部隊を率いる。

シンガポール

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

ヤオファンファン

姚芳芳 クー・シェンロン国防大臣の妻。香港人で元民主運動家。

第三次世界大戦3

パールハーバー奇襲

プロローグ

オアフ島ホノルル北方スコフィールド・バラックス——。

いつもと変わらぬ平和な午後だった。

中国と南シナ海で小競り合いがはじまり、軍に禁足令が出ていたせいで、街の人影はいつもより少ない。

オアフ島民は、すっかり姿を消した中国人観光客がいつ戻ってきてくれるかを心配していた。北米と中国との航空路は、完全に封鎖されていたからだ。

スコフィールド・バラックスは、オアフ島の内陸に位置する。陸軍航空隊の飛行場があり、大学

も点在しているホノルルのベッドタウンだ。

その日、ハワイ大学マノア校で機械工学を学ぶルーカス・カトー青年は、入ったばかりの大学の授業をさぼり、英語講師のバイトのため、ヤマハのバイクでスコフィールド・バラックスの語学学校へと向かっていた。

カメハメハ・ハイウェイの99号線を北へ走ると、前方にはウィーラー陸軍航空隊基地の滑走路がある。陸軍の汎用ヘリが一機、離陸して上昇するのが見えた。

だが突然、前方でピカッと光が瞬いた後、爆発が起こる。続いてドーン！ と腹の底に響くよう

な爆音が伝わってきた。

飛行機でも墜落したのかと思ったが、それを判断する間もなく、次の爆発が起こる。

駐機していた軍用機に何かが命中し、爆発で折れた翼が空中に舞い上がるのが見えた。

路上を走っていた車が一斉に減速して、ブレーキをかけはじめる。ルーカス青年も、バイクを減速して路肩に寄った。

胴体に小さな翼が生えたミサイルが、次々と突っ込んでくるのが見える。ここで、爆弾が落ちたのではなく、巡航ミサイルで攻撃を受けていることがはっきりわかった。

自家用車のドライバーが一人、車の脇に立ち、背後を振り返って何かを叫ぶ。ルーカスも後ろ見ると、パールハーバー方向ではさらに大きな黒煙が上がっているのが認識できた。

自分たちの前と後ろで何本も黒煙が立ち上り、

永遠に続くような爆発がくり返される。路上のドライバーたちは、いったいどちらへ逃げればいいのか、車外に出て茫然^{ぼうぜん}と立ち尽くしていた。

ルーカスは、そこではと我に返った。陸軍基地の基地内売店^{Px}で働いている母親の顔が、脳裏をよぎったからだ。すぐにスマホで母親と連絡を取ろうとしたが、繋がらない。回線は、とつくにパングしていた。

この状況がどのくらい続くかわからないが、電話が通じなければ直接出向くしかない。すぐさまバイクのスロットルを吹かし、道を塞ぐ車列の間を縫^ぬうように走りはじめた。

きつと中国の攻撃に違いない。遂に、全面戦争となったのだ……。

メレマヌ・パーク脇に差しかかった時、右手の街側からもの凄いスピードでピックアップ・トラックが飛び出してきて、ぶつかりそうになった。

ルーカスの、もうひとつのバイト先の営業車だ。

「ルーカスか？ どこへ行く!?」

「基地だよ！ 母さんが——」

ハンドルを握っていたタケル・サトーに怒鳴る。彼はすでに七〇歳を超えているが、ハンドルさばきも銃の腕も確かだ。

「今行っても、何もできないぞ。お前の母さんなら無事だろう。中国も、PXにミサイルをぶち込むほど暇じゃなからうて。今は俺に付いてこい！ 射撃場に向かう!!」

すでにピックアップ・トラックの荷台には、サトーが経営するガン・シヨップの銃器が満載されていた。助手席には、チヨコが乗っている。幼なじみである彼女の表情は、強ばっていた。

基地のフェンス際に沿って走ると、空襲警報が鳴っていた。ルーカスが初めて聞くサイレンだ。

すでにミサイル攻撃は終わっているようだが、基

地のあちこちで爆発が繰り返されていた。

フェンス際を抜け、基地を走り去ると、東へと逸^それて山中へと向かった。そこに、軍の払い下げでサトー一家が手に入れた観光客向けの屋外射撃場がある。

射撃場には、普段から銃の類が置いてあるわけではない。なんでそんな所に向かうのか理解できなかったが、言われるまま付いていく。

四〇分程走り続け、最後は未舗装の山道に分け入ると、漸^{よよ}く射撃場に着いた。

バイクを降りてスマホを確認してみたが、相変わらず全く繋がらない。

射撃場には、オフィスがあるわけでもない。ゴルフの打ちっぱなし場のような屋根付きのスペースはあるものの、盗難に備え貴重品の類は一切置かないようにしている。というか、物を置けるようなスペースがない。作業用のテーブルがある程

度だ。

壁には、この射撃場に関わった者達の軍隊時代の写真が飾ってある。そのほとんどは、戦死したか、天寿を全うしているのだが。

戦争で死んだ、ルーカスやチヨコの父親の写真もある。チヨコは、サトーの孫娘だ。

射撃場は、弾が外に飛び出さないように盛り土で囲んである。盛り土の外側はただの藪やぶなので、普段は誰も近寄らない。

サトーはそこに向かうと、地面に放り投げてあったベニア板を退かした。その下には、鉄板の分厚い扉が見える。

そんな構造になっていたなんて、ルーカスははじめて知った。

盛り土の下には、部屋が作ってあるようだ。

サトーが「発電機を回せ」と言うので、ポータブル発電機を回した。いつもは、客用の扇風機

を回すために使っているものだ。「入れ」と命じられたので、怖々とその中に入った。横に一〇メートル以上はある部屋で、壁はラック構造になり、ガン・シヨップもかくやの銃器が並べられている。換気扇が回り、中のじめつとした空気を入れ換える。

「緊急持ち出し手順だ。まず、カービン銃と狙撃ライフル。それから無線機。衛星無線機以外なら極超短波UHFから短波無線機まで揃っている」

ラックに置かれたカービン銃や狙撃ライフルは、どれも法執行機関以外への販売は厳しく規制されているものだった。

長椅子の上に腰を下ろしたサトーは「遂に着た……」と漏らした。

「戦争がはじまった時、俺の親父は一七歳だった。収容所から第四四二連隊に徴兵ちようへいされて戦った。そして、生き残った。戦友の半分は還らなか

つたらしい。親父は戦後、愛国者として振るまい、商売にも成功した。ベトナム戦争が一段落し、日本からの新婚旅行客がハワイに押しかけけると、親父は軍からの払い下げで射撃場を買ってこのガン・シヨップをはじめた。表向きは、商売のためだった。だが親父は、国を信じちゃいなかった！ 全くな!! またいつか、自分の家族が収容所に送られる日がくると信じていた。その日に備えて、合法的に武器弾薬を集めるためにガン・シヨップをはじめたんだ。それを俺が引き継いだ。もちろん、この半世紀の間に敵は交替した。自分の政府からソヴィエトに、そして中国に——」

ルーカスは、ぼやくように言った。

「俺、銃の分解はできるし、射撃の腕もそこそこだと思っけど、戦闘訓練は受けてないよ」

「だから、あれほど予備役将校訓練課程^{R.O.T.C.}のプログラムを受けると言ったのに！」

「いやだよ。休みは潰れるし、バイトもできない。結局、大学を出ても軍に入るしかなくなるじゃないか。あんなのは、貧乏人相手の徴兵制度だ。それに、戦争になったら母さんがひとりぼっちになる。チヨコが大学を諦めた理由だって……」

「いいのよ。あたし、もともと勉強とか嫌いだし」
チヨコは、気にしていないという顔をしている。
「心配するな。仲間はいるし、増やせる。それがレジスタンスだ」

「レジスタンス？ そんな必要があるの!! ハワイは、要塞みたいなものじゃん。観光客より軍人の数が多い。だいたい、これはミサイル攻撃だろ」
「海軍は出払っている。空軍基地も燃え、陸軍の基地もあのザマだ。しばらくは軍の反攻は期待できない。ここまで来る間、ずっとラジオを聴いていたが、ホノルルに陸兵が上陸している。どうやって上陸したかはわからないが」

「……まさか」

「これから山ほど、信じられないと言わざるをえない事態が起こるだろうさ」

バイクのエンジン音が響いてくる。山道を誰かが登ってくるようだ。クラクションを時々鳴らすのは「撃つな」という合図だろう。

外に出ると、陸軍のツナギを着た黒人兵士がノーヘルで走り込んできて、バイクを捨てると転がるようにこちらへ駆け寄ってきた。

男は、走りながら敬礼する。

「サトー少佐でありますか!! 自分は、イノウエ大尉の部下の、ジミー・ボラード伍長です!」

「部隊は無事か!」

「はい。ちょうど、訓練でプールに入ろうとしていた時でした」

「基地は? どんな様子だ」

「わかりません。自分は、まだミサイルが降り注

いでいる中を走ってきたので……。滑走路に孔が

開いたとは聞きましたし、武器弾薬庫の爆発はこの目で見ました! 中国軍の攻撃は、精確そのものです。——大尉から、ここへ向かうよう命じられました。可能な限りの武器弾薬を持ち出すが、そちらでも用意してほしいということです。そして、集結場所はヨルムガントでいいか、と」

「いいや、駄目だ。あそこは海岸地帯で、中国の後続部隊が上陸してくるかもしれない。それに、ホルルからも遠すぎる。ひとまず、ラグナロクに潜むと伝えてくれ。こちらの手持ちは、アサルト五〇挺に、M72 LAWが一〇基。弾は何とかなる。そっちは?」

「現状では、部隊の装備品程度しか……」

そう言いながら、伍長が背負ったザックから無線機を取りだしてサトーに渡した。

「部隊の秘話装置付きUHF無線機をお預けせよ、

とのことでした」

「じきに、無線妨害もはじまる。その場合の連絡方法は、ルールブックに従うと報告してくれ。レジスタンス・グループはこちらで引き受ける。君らはまず、基地の立て直しに全力を挙げてくれ。

敵は陸兵を入れたらしいが、ホノルル市街地にパールハーバー、ヒッカムの占領でしばらくは大忙しだろう。その隙に、陸軍は反撃の準備をすべきだな」

「はい、すべて伝えます！」

伍長は、再びバイクで戻っていった。

「……イノウエ大尉って、あの水中処分隊^{D^T}の？」

「ああ、7 EDD——第7エンジニア・ダイブ分遣隊だ。太平洋エリアでの、唯一の陸軍のU D T だな。水中工作が専門だが、俺が部隊を立ち上げた頃からさらに改変され、陸上での戦闘もピカイチだ！ 役に立つだろう。……さてと、今は

無人航空機^{U^AV}もある。敵がこの射撃場に気付くのは、時間の問題だ。持ち出せるだけの武器弾薬を、ラグナロクに隠すぞ！」

「どこさ、そのラグナロクって」

サトーはニヤリと笑った。

「途中に通った、サークル・ヒルの住宅街だ」

そこはかつて、ルーカスとチヨコが育った場所。陸軍の妻帯者用住宅が建ち並ぶ街だ。

「敵も、そこまで搜索の手を広げるには時間がかかるし、何しろ軍人の街だから、防秘にも有利だ。背景はこの通りのジャングルで、脱出にも便利だしな」

「荷物は運ぶけどさ……。これは、俺やチヨコがやらなきゃいけないことなの？」

「自分たちが生まれ育った島を、敵の侵略から守るんだぞ。何の疑問がある？」

「俺もチヨコも、別に国に恩義はない。恨みはあ

つてもな」

そう言うのと、意外にもサトーは「わかった」と頷いた。

「その話は、荷物を運び終わってからゆっくり話そう。今は、お前たちの協力が必要だ」

結局、手前の街まで一回荷物を運んでから、そこでピックアップ・トラックを二台借り、三往復して武器弾薬を全て運び出した。

その頃には、テレビはもとよりラジオの送信も止まっていた。携帯網もダウンし、情報はアマ無線でしか入らなくなった。

街から南の方角を見遣ると、陸軍基地、ホノルル方向に位置するヒッカム空軍基地、パールハーバーに、煙が上っているのが見える。黒煙が、水平線に帯状に広がっていた。

そこら中でサイレンが鳴り響き、住民たちは家の外に出て情報交換をしている。

ホノルルから自家用車での脱出を試みる者が多いため、道はしばらく渋滞していたが、やがて中国軍が外へ出る道路を封鎖したらしく、車の流れも途絶えた。

つまり、ホノルル市街地に入る術もなくなったということだ。

第一章 パールハーバー

アメリカ初の女性大統領であるエリザベス・ケ
ンジントン政権は、迫りくる大統領選挙を無難に
クリアし、レジエンドを作るための順風満帆まんぱんな二
期目をスタートさせるはずだった。

その躓つまずきは、意外な形で訪れる。

彼女の最大の支援者であったIT長者トム・ハ
ワードの妻と娘が銃撃戦に巻き込まれ、結果、娘
が死亡したのだ。その銃撃戦は、中国で巨額の横
領を働いた末、亡命していた男に、祖国の特殊部
隊が接触し、発生したものだ。

それからの米中関係は、まるで坂道を転がり落
ちるように悪化する。

中国本土への米空軍による爆撃、そして南沙海
域での軍事衝突へ発展したのだ。だが、それ
でも本土が脅かされるという危機感は、まだ米
国政府内にはなかった。ケンジントン政権にと
っては、中国問題より、政権が崩壊したサウジ
アラビアの後始末の方が、優先事項だったから
だ。

ホワイトハウス西館大統領執務室ではその
夜、南沙を巡る情勢やサウジ情勢に関して、
スタッフとのミーティングが開かれていた。

そこに広報室長のクインシー・ショーが飛
び込んできて、はじめてハワイが燃えている
ことを皆知ることになった。

テレビの中——ホノルルからの生中継は、だが三〇分後に画面が暗転。それが、ハワイからの最後の中継になった。この五分後には、テレビやラジオだけでなく、SNSに關してもホノルルからの書き込みが一切途絶え、オアフ島が孤立したことが明らかとなる。

「……地下のシチュエーション・ルームに移った方がいいな」

首席補佐官のコリン・コンラッドが、大統領を促した。

「嫌よ、あんな所に逃げ隠れするなんて、真っ平！ それに、あそこは軍人と国家安全保障のスタッフしか入れないじゃない」

「ここで入れないのは、広報室長だけのようだが」

「閣下、私なら構いません。早朝に公表するステートメントの文案を考えていますので」

クインシーが部屋を出ようとした。

「待って、クインシー。貴方はどう書くつもり？」

「それはもちろん、一九四一年のルーズベルト大統領の演説を参考にし、一部はなざることになります。——今日という日は、合衆国にとつて恥辱の日となりました。われわれは中国から、突然で卑劣な奇襲攻撃を受け——」

「上下両院議員を集めた場で、ルーズベルトを彷彿とさせる演説を行い、中国への憎悪を煽って全面戦争を仕掛けると宣言するわけ？ 無条件降伏しなければ、上海や厦門に原爆を落とすと脅して」

「しかし、この事態は日本軍のパールハーバー攻撃より悪質だと思います。陸兵も上陸しているということですし」

「現地と連絡を取る術は？ スパイ衛星以外に、ハワイの状況を知る手立てはないの!？」

大統領執務室には十数名のスタッフがいたが、核のボタンをもつ陸軍大佐は控え室。その場に、制服組の軍人は一人もない。

国家安全保障問題担当大統領補佐官のアマンガ・マクノートンが、五分前に差し入れされたメモを手にと口を開いた。

「現状、オアフ島駐留四軍との無線交信は絶たれています。これは妨害や破壊ではなく、現地部隊が自動的に秘匿モードに入った可能性もあるということです。攻撃を受けたのはオアフ島だけで、ハワイ島は無事です。空軍部隊が若干展開しており、偵察機を出すことは可能。また、パールハーバーを出港したばかりのイージス巡洋艦、マッキヤンベルグが沖合に留まっています。必要なら陸戦隊を編成し、ただちにホノルル市内に上陸できます」

「止めて！ 悲惨なことになるわ!! そもそも、

敵はどこからミサイルを撃ち込んできたのか、わからないのよ。沖合に出てまず自分を守り、敵を探そう命じなさい。それでいいわね、コリン」

「同感だ。攻撃の規模もわからないのに、これ以上、貴重な戦力を危険に晒せない」

アマンダは持っていたノートの端に走り書き、破って秘書に手渡した。

「国内では、すでに副大統領がE-4B^N国家空作戦指揮機に座乗して中西部へ飛び立ちました。もう一機は、アンダーセンで待機中。下院議長は、ジョージ・ワシントン国立森林公園にあるホットケイブの地下要塞に向かっています」

「私が乗る機体はあるのかしら？」

「アンダーソン空軍基地が攻撃を受けた場合に備えて、エアフォース・ワンはDC近郊上空を旋回中です。確認しますか？」

「冗談よ、ここを動くもんですか！ 北京^{ベキン}へのホ

ットラインは？」

「攻撃がはじまる三〇分前から、不通のようです。軍事的オプシオンを考えました」

「聞くわ」

アマンダは、急いでノートを捲る。

「まずオアフ島の奪還ですが、これは作戦立案を含め、時間がかかります。軍に初動を命じるだけで数日はかかり、明日明後日決行できるものではありません。そこで、まず報復攻撃を行い、われわれの反撃の意思を中国に伝える必要があります。問題は場所ですが、ハワイという米本土が攻撃された以上、われわれも中国本土を攻撃すべきです。南沙問題を有利に運ぶためにも、中国軍の海南島^{かいなんとう}基地を爆撃するのが、最良かと判断します。ここなら、民間への被害を最小限にとどめ、かつ最大のダメージを与えられます」

「大陸本土とも言い難いし、こちらの抑制した態

度を示せる。ターゲットに関する、最良の選択だと思う」

コンラッドも同意した。

「その場合、SATO艦隊にも攻撃への参加を呼びかければいい。〈連合軍〉対〈非道な中国〉。そういう図式を、世界にアピールできる」

「はい、首席補佐官。南アジア^{S.A.}条約機構艦隊が応じるかはわかりませんが、日本の参加は是非ほしところ。SATO艦隊の実態は、日本の海上自衛隊です。必要なエアカバー^{エアカバー}が得られるでしょう。中国に反撃すれば、われわれは時間稼ぎができます。世論を宥^{なだ}め、ハワイ奪還のために作戦を練り、部隊を準備する時間を手にできる」

「太平洋にわが艦隊は？」とケンジントンが質した。

「僅かですが、います。必要なら、大西洋艦隊にパナマ運河を通過させます」

「確か、ハワイより西に、我が海軍の空母機動部隊は一隻もないのよね? 中東に出払っていて、それで、グアムにいるこちらのステルス戦闘機は何機? 二〇機? 四〇機?」

「米本土から増援部隊を飛ばします」

「つい一時間前、海南島に集結中の中国空軍部隊の戦力に関して、報告を受けたばかりよ。こちらの攻撃部隊は、B-2爆撃機だけでは済まないのでしょう? たぶん、B-52爆撃機も参加することになる。それを、いくらステルスとはいえ、たった二、三〇機で護衛しきれぬのかしら?」

「SATO艦隊には二隻の空母があり、F-35B型戦闘機を三〇機以上積んでいます。必要なら、ベトナム空軍に基地使用を願い出ることも可能です」

「貴方、海南島占領とか考えているの?」

大統領は、アマンダの瞳をじっと覗き込んだ。

それに対しアマンダは、小さく頷くと「世論の動向次第です」と応じる。

「爆撃した後、海兵隊を上陸。空挺部隊も投入し、占領します。上海を爆撃するよりは、マシな作戦です」

「……いいでしょう。作戦の検討を許可します。そうなる前に、オアフ島を奪還したいけれど。コリン、優先順位は?」

「オアフ島現地との通信網を確保し、現地情勢の把握に努めることが第一だ。敵上陸部隊の戦力の見積もり、増援部隊の接近阻止。必要なら、敵情偵察に、SEALsを潜入させることも必要になる。付近に潜水艦でもいればの話だが……。そして君は、明日の上下両院議会で発表する声明の草案作りだな。この半世紀、語り継がれるスピーチになる。あの日のルーズベルトのように」

「クインシー、スピーチライターを総動員して、

声明を二本作って頂戴。一本はルーズベルト風に、敵を罵^{のの}り国民の奮起を促して奪還と報復を誓う二〇世紀風のスピーチを。もう一本は、敵には自制、国民には忍耐を求め、粘り強く原状回復を訴える二一世紀風の平和志向の原稿。おそらく、その両者の中間をとった中庸^{ちゅうよう}のスピーチになると思うわ」

「わかりました。ただちに取りかかります。午前八時頃までに――」

「いいえ、六時までに用意して。手直しの時間も必要だわ。それと、もし短波ラジオや衛星テレビの回線が生きているなら、ハワイ州民向けのメッセージも別途録音しましょう。その原稿もお願い」

メモを走らせていたクインシー・ショーが、部屋を駆け出ていく。

「……私の再選の芽は、まだ残っているかしら」

「この問題の処理如何^{いかん}だろうな。おそらく、独立検察官を命じて、なぜ誰も敵の上陸に気付かなかったかを聴聞会^{つまび}で詳らかにする必要があるだろう。大戦時のパールハーバーでは、それで提督の首が何人も飛んだはずだ」

「何百光年も離れた恒星系で、惑星を探せる時代なのに、世界で最も軍隊が密集した島の状況がわからないなんて、皮肉^{ひにく}な話だわ」

「閣下、一時間後、地下のシチュエーション・ルームで、国家安全保障会議を開きます。それまでに、もう少し情報が集まるだろうと」

そう言ったアマンダは、ここから逃げ出したい気分だった。

状況の進展によつては、誰かがまた詰め腹を切らされる羽目になる。

敵の奇襲攻撃を予測できなかったのは軍の責任

だが、こちらにも飛び火しないとは限らない。

あの時代、パールハーバー奇襲を受けた後のワシントンDCは、戦争そつちのけで奇襲攻撃の戦犯捜しに狂奔^{きようほん}したのだ。

今回も、避けられないだろう。

自分のリスト入りを避けるためには、自分の代わりになる生け贄^{にえ}を用意するか、戦果を上げて点数を稼ぐしかなかった。

アメリカ陸軍第25歩兵師団の師団司令部は、ハワイのスコフィールド・バラックスに本拠地を置くが、隷下の第4空挺旅団^ススパルタン^グは、アラスカに本拠地がある。

そして彼らの一部は、この一週間、ワシントン州のヤキマ演習場に展開中だった。

パールハーバー奇襲の第一報が飛び込んできた

のは、夜間の訓練に備え、夕食に入った後だ。すぐに夜間訓練は中止、兵士全員がかまぼこ形の兵舎で待機となった。

ハワイへの反撃となれば、この部隊が先陣をきりオアフ島に空挺降下することになる。

隊員の一定数は、ハワイの出身者だ。

第501落下傘歩兵大隊^スジェロニモ^ス本部管理中隊付き偵察小隊を率いるカイル・バタスキー中尉は、指揮所の天幕に目立たぬよう部下を一人一人呼び出した。全員が集まるまで、二〇分近くを要する。

傍らには、小隊を纏める補佐役のトーマス・ワシントン曹長。背後には、大隊長のクラーク・マッケンジー中佐が立っていた。ワシは中国系、マッケンジーは白人。バタスキーは黒人。これから呼ぶ部下たちは、さらに多彩な人種になる。

「この人選で間違いないと、君らは断言できるん

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。